ブルーライト♪ ウミホタル

ウミホタルの吐き出した液が、ペットボトルの底ににじむように青く浮かび上がる

ウミホタルは不思議な生き物だ。意外と身近にいるのに、なんだか謎めいている。ホタルといっても、カニやエビ、ミジンコといった甲殻類の仲間。夜の海で青い光を出して輝く姿は、とても幻想的できれいなのだとか。大阪自然環境保全協会内のグループ「海のふしぎ観察会」の下見に参加させてもらった。

きれいな海の天の川

上3ミリ程度の大きさのウミホタル 下採取して乾燥させたウミホタル＝いずれも大阪自然環境保全協会提供

日暮れには少し早い時間、観察会のスタッフ約20人と大阪府岬町にある「せんなん里海公園」へやって来た。海水浴シーズンも終わった人けのない浜辺で、まずはウミホタルを捕まえるための仕掛けを準備する。

用意したのは空のペットボトル。肩のところで切り、中にエサとなる魚肉ソーセージやカニカマ、チクワを入れる。ウミホタルは肉食なのね。

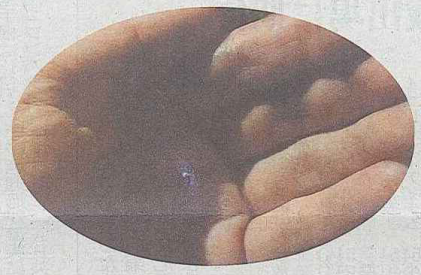
「普段は死んだ魚などを食べています。いわゆる『海の掃除屋』、英語で言えば『スカベンジャー』の一種です」とスタッフの宮川訓さん。じゃあ、今夜はごちそうだ。

次に、重りになる小石を入れ、ペットボトルの切った上部分を逆向きに装着すれば完成だ。のりやコーヒーのびんの蓋（ふた）に穴を開けるだけでもOK。長さ5メートルくらいのビニールひもを結んで、突堤から海に投げ入れる。このまましばらく置いておけば、ウミホタルが採取できるそうで、思ったより簡単だった。

待っている間に、スタッフの石川由紀子さんがウミホタルの生態について教えてくれた。「体は2枚の透明な殻に包まれていて、大きさは3ミリ程度。昼は海底の砂の中で眠っていて、夜になると泳いでエサを探します」。4億5000万年前、カンブリア紀の化石からも、今とほぼ変わらない姿で見つかっているそうだ。

気になる光の正体は、ウミホタルが刺激に反応して吐き出す「ルシフェリン」と「ルシフェラーゼ」という液体。これが海水中の酸素と反応して、青白く発光するわけだ。「外敵を驚かせて、身を守るためだと言われています。タコやイカがスミを吐くのと同じですね」

お弁当を食べていたら、いつの間にか辺り一面真っ暗に。「そろそろかな～」と引き上げてみると……。いた！　ペットボトルの底にチラリと光を放つウミホタルを発見！　たぶんウジャウジャいる。うわあっと感動のあまり、勢いよく水をこぼしてしまった。石畳がキラキラして、それもまた美しく、見とれてしまう。



手に1匹くっついていた。星を捕まえた気分

皆で集めたウミホタルをバケツに入れ、網ですくって揺らして刺激を与えると、ますます盛んに光りだす。闇の中に流れ出した液体が尾を引き、鮮やかな蛍光色に浮かび上がる光景は、なんて神秘的。まるで天の川だ。手に取ってみると、星をつかんだ気分になる。スタッフの娘さんのほっぺたにもお星さま。ふふふ、と思わず顔を見合わせて笑った。

「海に魚の死骸が浮いていないのは、こうした生き物が食べてくれているから。人間の知らないうちに、海を守ってくれているんですよ」と宮川さんが言えば、「澄んだ水の中にしか暮らせないのは、陸のホタルと一緒」と石川さんも話す。ウミホタルは、きれいな海のシンボルなのだ。

（ライター・福家多恵子、写真も）

＝次回は10月12日

ふくや・たえこ　大学で生物研究同好会に在籍、身近な生き物の不思議を探求するのがライフワーク。大の猫好きで、現在は10年前に拾った黒猫ムサシ、トラ猫コジロウと同居中。写真は「ウミホタル採ったどー」と喜ぶ筆者。

ウミホタル

日本の沿岸に幅広く生息する甲殻類。7対の足を持つ節足動物で、米粒のような姿をしている。複眼で、あまり細かくは見えない。卵はメスの体内でふ化するまで育てられる。光から逃げる性質を持っているため、発光は仲間に危険を知らせるサインにもなっていると考えられている。活動が活発なのは春～秋。

海のふしぎ観察会

「夜の海でウミホタルを観察しよう」21日（土）、岬町の「せんなん里海公園」で。中学生以下は保護者同伴。参加費は大人300円、子ども200円。先着順で、残りわずかなので、希望者は大阪自然環境保全協会内「海の観察会」係（06・6242・8720）へ申し込みを。